

# 共に考える 住宅デザイン

甲斐 徹郎

○74○

## 樺ハウス

沖縄の街並みは、一九六二年を境に、大きく変化しました。六二年に沖縄で何が起きたのかというと、木造住宅の着工数を、コンクリート住宅が追いついたのです。この年以降、沖縄では今日のようにコンクリート住宅が主流となっていきました。

この技術の進歩は、個人にとって、住宅の存在を大きく変えました。この技術によって、個人は初めて、自分のための、自分らしい住宅を、自分の思いのままに造ることが可能になったのです。逆に、木造技術しかなかった時代には、こうした個人の自由には制限がありました。構造的に弱い木造住宅を台風の猛威から守るためには、石垣やフクギの生け垣など、家の外での備えを丁寧に造り、建物は重心を低く抑える、といった形式を無視することが許されなかったのです。そうした

# コミュニティ再構築

## 自由と環境 両立図る

のライフスタイルを追求も失いつつあります。私には、こうした現代の自由な住まいづくりを可能にしました。しかし、都市問題を改善するため

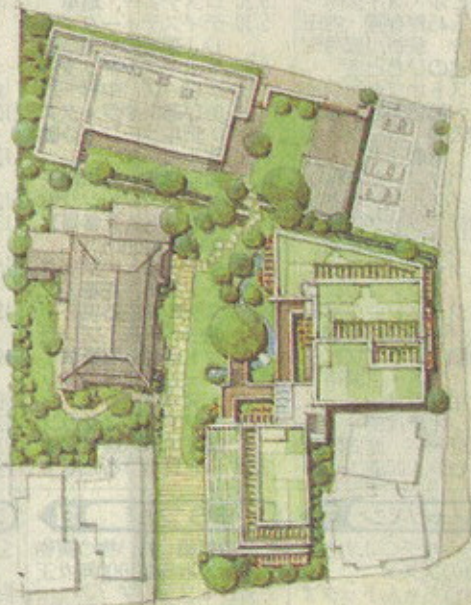
に、これまでの技術の進歩を否定するつもりはありません。重要なのは、ここまで進歩した技術をベースに、「個人のプライバシー」と「コミュニティ」のそれぞれの良さを両立させる、新しい価値を創りだすことだと思えます。

追求めた二年越しのプロジェクトがようやく先月完成しました。世田谷(東京都)の真ん中に誕生した五階建て、十五世帯の都市環境を改善するために、こうした合理的な考えに基づく「コミュニティ」の再構築が重要になっていくと思えます。(マーケティングコンサルタント)

制約が、あの沖縄特有の伝統的民家のスタイルを生み出し、そうした住宅づくりが、調和の取れた美しい街並みをつくってきました。



地主と「樺ハウス」の敷地との関係。互いに緑を共有価値とすることで、緑豊かな自然環境が形成された。



「樺ハウス」の全体イメージ(イラスト・堤野仁史)



「樺ハウス」全景(撮影・坂口裕康)